五・四運動

天野元之助

一

一九一四年八月一日ドイツのロシアに對する宣戰布告に始まる第一次世界大戰（1914. 8.—1918. 1.）に際會して、同月二三日日本は「日英同盟のよしみによって」ドイツに對し宣戰布告、

これに先立つ八月七日、イギリスがドイツの東洋艦隊を一掃するため日本に軍事援助の要請があり、同月十五日日本軍が駐華ドイツ軍に對し最後の通牒を出している。（①七八—七九頁、②）

同二五日駐華日本公使は北京政府外交部に對し、日本の對ドイツ宣戰のことを通告し、九月二日日本軍隊は山東半島（龍口）に上陸。ドイツの膠州灣租借地ならびにその經營にかかる膠濟鐵路沿線を占領。

すなわち九月二五日日軍は濰縣ステーション—交通機關、十月六日には濟南ステーション、十一月七日には青島を占領。②

翌一九一五年のはじめ、日本は福州・厦門・吳淞・太沽に艦隊を集結し、また山東および南滿洲に增兵（三万②）して、一月十八日午後四時大隈重信内閣は、袁世凱大總統に對し『懸案解決』の名のもとにいわゆる二十一ヵ條（Twenty-one Demands. 四つの要求條項と一つの希望條項）を提出した。

時の外務大臣加藤高明が駐華公使日置益に交付した訓令は、①一五四頁以下にのす。そして二十一ヵ條問題については、堀川武

夫『極東國際政治史序說――二十一箇條要求の研究』（一九五八年刊）と、植田捷雄「大正四年日華二十一箇條約と滿洲事變」（『現代中國を繞る世界の外交』一九五一年刊）をあげておく。

日本はヨーロッパでの戰爭を奇貨として、この要求を提起して在華權益の擴大をねらい、滿洲（今日の東北）・山東・福建を三大據點としてその勢力を浸透させ、さらに漢冶萍公司（一八九八年來大冶の鐵鑛石が日本に輸入されていた）への日本資本の導入（日華合辦）によって長江流域の重工業の掌握を企圖、更に北京政府に對して強い發言權を希望した。

交渉は三ヵ月有餘、回を重ねること二五回。これが世に洩れるや、イギリス・アメリカの抗議がおこり、日本は第五號の希望條項を將來に留保し、五月七日（以後この日が華北で國恥記念日となる）午後三時、五〇時間（九日午後六時まで）を期限とする最後通牒を發し（全文①一七六―一八〇頁におさむ）、ここに九日（南方ではこの日が國恥記念日とせらる）外交部は之を承認し、〔大正四年〕五月二五日日置益公使と陸徵祥外交總長の間に條約又は公文交換の形式で調印、六月八日相互批准交換が行われた。

すなわち「山東ニ關スル條約」（外に公文二）、「南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約」（外に公文八）、「漢冶萍公司ノ件」（公文）、「福建省ニ關スル件」（公文）、「膠州灣還付ノ件」（公文）（①二一五―二二一頁、③二二―二三〇頁）でもって、二十一ヵ條のうち十六ヵ條が認めらる。〔ちなみに一九二二年二月のワシントン會議で、日本は山東の還付とともに上記十六條のなかから六ヵ條を放棄することとなる〕

その後一九一七年八月十四日北京政府（馮國璋代理大總統、段祺瑞總理）は、ドイツ・オーストリアに對し宣戰を布告。（その文は④八三―八四頁）

これより先、この大戰が勃發するや、一九一四年八月六日袁世凱は局外中立を宣言（同十二日各國承認す）。日本の山東出兵に際し、中國はその攻略に協力せんとして日本の拒否にあい、翌十五年十一月中國また戰爭參加を提議

して日本に阻止せらる。(④五二頁)ところが一九一七年二月ドイツの潛水艇封鎖政策が實施されるに及んで、三月十四日中國政府はドイツ政府に向って外交關係の斷絶を宣告(大總統布告の對德國絶交文は④六六―六七頁)、さらに日本の慫慂もあって上記の如き對獨・墺宣戰の布告となる。

そしてロイド・ジョーヂの要請もあって、北京に僑工局を設けて十四萬(二〇萬ともいう)の華工(クリー)を募集してフランスに送り、彼等を前線の作戰に使用することを許した。

こうした華工たちは、大部分フランスの軍事工業・運輸機關ではたらき、一九一八年大戰終結と共に歸國し、「赴歐勞工團」を組織して盛んに宣傳し、中國勞働者階級に少なからず影響を與えたという。⑤

大戰の終結と共に、一九一九年一月中國はパリ平和會議に外交總長陸徵祥・駐米公使顧維鈞・駐英公使施肇基・駐佛公使魏宸組および南方軍政府駐米代表王正廷の五代表を送って、

この首席代表陸徵祥こそは、日本の二十一ヵ條要求について直接折衝した人物である。

二十一ヵ條の廢止、山東還付の要求と、不平等條約撤廢の七項希望條件を提出したが、

希望條件七項目とは、左のごときものである。

一、各國が中國に有する勢力範圍の放棄
二、各國の駐華軍隊および警察の撤退
三、各國の在華郵政・電信業務の撤消
四、領事裁判權の取消
五、租借地の返還
六、租界の返還
七、關稅自主權の承認

參戰の代償として獲たものは、義和團事件に際し八カ國連合軍が北京に入城したとき、ドイツが持ち歸った天文儀器の返還にすぎず。中國の希望と要求は完全に拒絶され、二十一カ條に對しては討論の範圍内にあらずとされ（審議拒否）、ドイツの山東省における一切の權利と利益は、日本に完全に譲渡されたのである。（『パリ平和條約』第一五六―一五八條、③七九九頁）

パリ平和會議が中國の山東回收の主張を正式に否定したのは、一九一五年四月三十日であったが、陸代表が山東問題の交渉經過を北京政府に打電し、「今回の平和會議でわが國の主張が斥けられた原因は、一つには一九一七年二、三月の間、日本と協商國（イギリス・フランス）の間に青島を日本に譲渡する密約のあったことと、二つには一九一八年九月（二四日）わが國當局（段祺瑞北京政府―駐日公使章宗祥）と日本政府の間に「政府は欣然同意す」という山東交換公文があったので、アメリカの斡旋も如何とも爲しがたかった」と。（⑥一五〇頁・⑱四三頁・⑫三〇頁）

これに對し中國人の失望と激昂は極點に達し、刁敏謙氏によれば「全國民が憤怒と失望の爲に一人であるかのように立ちあがり、……不法な山東條項に關して保留を聲明するのでなければ、平和條約に調印してはならないと主張した電報が、少なくとも一千通から中國委員の身のまわりに降り注いだ」と。（"China Awakened," 1922）（⑦四三八―四三九頁）

この中國外交失敗の報が一たび本國に傳わるや、廣範な民衆の反帝運動――いわゆる「五・四」愛國運動が、その火蓋を切るのである。

二

しかも此の運動をおこした導因には、一九一六年來の新文化啓蒙運動という思想的準備があったし、これについては、⑧拙稿「新文化啓蒙運動」にゆずる。

一九一七年のロシア十月〔社會主義〕革命が、中國の民族的自覺に極めて大きな動力となった。

これについては、丁守和・殷叙彝・張伯昭『十月革命對中國革命的影響』（一九五七年、北京人民出版社刊）をあげておこう。

中國では、十月革命に對しいち早く北京大學の李大釗教授が「庶民的勝利」および「布爾什維主義 Bolshevism 的勝利」の兩論文（『新青年』第五卷第五號、一九一八年十月十五日發行）を草して、最大の情熱をもって之を迎え、第一次世界大戰の結果は、帝國主義國家の勝利ではなくて、社會主義の勝利であり、二十世紀の新潮流の勝利であるとし、「自由の曙光現れたり！　試みに看よ、將來の環球を。必ずこれ赤旗の世界！」と宣言した。また毛澤東『論人民民主專政』（一九四九年六月三十日發表）は、「中國人がマルクス主義をさがしあてたのは、ロシア人を介してであった。……十月革命の砲聲が轟いて、我々はマルクス・レニン主義を送り屆けられた。十月革命のおかげで、全世界のそして又中國の先進的な人々が、國家の運命を考える手段として、プロレタリア階級の世界觀を用いて、自分達の問題を新しく考え直すようになった。ロシア人の歩んだ道を進め――これが結論である」とす。（⑨五四三頁に據るも、若干改む）

この十月革命の勝利は、世界のプロレタリア解放運動を誘發し、

翌一八年一月フィンランドのプロレタリア革命運動、八月日本の米騒動、十一月オーストリアおよびドイツの君主政權顚覆革命、翌一九年三月朝鮮獨立運動＝萬歲事件、三月ハンガリーのプロレタリア革命（四カ月間政權維持）、四月バヴァリア・ソヴェット共和國の樹立等。（⑩事項解說參照）

中國ではいわゆる「五・四」運動として、日本帝國主義とその走狗・親日派中國官僚に、その鋒先が向けられた。

ところで此のころ、ロシアの十月革命の極東への波及を抑壓せんとする日・米を主とする連合國の政治・軍事行動がおこり、一九一八年三月二五日わが外務大臣本野一郎と駐日公使章宗祥が『共同防敵に關する公文』を交換し、五月十六日わが陸軍少將齋藤季治郎と陸軍總長靳雲鵬の間に北京で秘密裡に『陸軍共同防敵軍事協定』全十二

條が結ばれ（③七二〇―七二二頁）、つづいて同月十九日わが海軍少將吉田增次郎と海軍中將沈壽堃の間に『海軍共同防敵軍事協定』全九條が結ばれた（③七二二―七二四頁）。そしてこれには日本の財政的援助が含まれ、七月三一日わが泰平公司代表高木潔と陸軍總長段芝貴の間に兵器借款二、二四二萬圓が、また九月二八日には朝鮮銀行總裁美濃部俊吉と駐日公使章宗祥の間に參戰借款二千萬圓が成立（③七三一―七三二頁）、これで中國の邊防軍三箇師團が組織され、わが將校が多數顧問に就任することとなる。

さて此の情報を探知した留日學生は五月六日の夜、各省・各校代表四六名（うち女子三名）が、東京神田（現在の專修大學前電停そば）の中國飯館維新號で秘密裡に會議を催して、わが警察に逮捕される事件が發生し（⑪一一七―一二七頁）、そのため多數の留學生が歸國して五月十二日「留日學生救國團」を結成し②、日本軍が北洋軍閥と勾結してシベリアに共同出兵し、十月革命に對し武力干涉せんとしていると宣傳し、いよいよ軍事協定が秘密裡に締結されるや、五月二一日北京大學、高師、工專、法專、醫專等北京所在の十餘校の學生二千餘人が、デモ行進をやって總統府に赴き、『中日共同防敵軍事協定』の密約に抗議し、ただちに協定全文の廢止ならびに發表を要求した。（②、⑫七六頁）

尤もそのデモ請願は、效果が無かったが、北京に「學生愛國會」が成立して、南北學生の連絡がとれ（當時北京大學學生だった鄧中夏が活躍す）、八月には全國的な學生愛國團體「學生救國會」が組織され、一九一九年一月から北京で『國民』（月刊）を出版し（李大釗の發起で各地の學生救國會の會員から五元づつ出させ、一千餘元で出版、鄧中夏・黃日葵らが編輯）、同學の連絡と抗日救國の宣傳誌となった。（⑫六三、七六―七七頁、⑬一〇五頁）

そのころ（一九一八年）北京大學では、圖書部主任で政治系教授李大釗（守常）が馬克思主義研究會を組織して同圖書館で晝夜研究し、學生救國會・少年中國學會（一九一八年六月創立）や新潮社の負責人たち（北京大學の進步的な學生が、一九一九年一月より『新潮』月刊を發行、⑫六三―六四頁）も、ここに常時集まって青島問題を討議した（⑭六

頁)。これらがパリ平和會議で中國外交の失敗の報に接するや、統一戦線を結成するのである。

三

さて「五・四」運動は、一九一九年五月四日(日曜日)北京にある十四校(北京大學・清華大學・高等師範・中國大學・朝陽大學・工業專門・警官學校・醫學專門・農業專門・滙文大學(燕京大學の前身)・鐵路管理・法政專門・稅務學校・民國大學)の學生三千餘人(五千餘人ともいう)が、

『初級中學課本中國歷史』第四冊は三千餘人とし、『高級中學課本中國歷史』第四冊は五千人とす。そして學生の多くは長袍をきていたという。(⑫八四頁)

萬餘の傳單を用意し(その內容は⑭一一九頁をみよ)、手に白旗(それにはおもいおもいのスローガンを書き)、更に「中國は中國人の中國だ」・「外に國權を爭い、內に國賊を懲せ」、

「外爭國權、內懲國賊!」のスローガンは、羅家倫が「五・四の朝、かれがつくった宣言の中でこさえたものだ」と、『一年來我們學生運動底成功失敗和將來應取的方針』(『新潮』第二卷第四號、一九二〇年五月刊)で述べている。

「平和條約の調印を拒絕せよ」(「拒絕和約簽字!」)・「二十一ヵ條を取消せ」・「死を誓って青島を爭回せよ」・「日本商品のボイコット」(「抵制日貨」)・「賣國の漢奸を排除せよ」(「懲辦賣國賊」)などの旗幟を高くあげて、午後二時紫金城の正門・天安門前に集まり、

ここで彼等は教育部代表と北京市警察廳長の威脅的な勸告を憤然として拒絕し、行動を決定する臨時代表會議を開き(⑱四五頁)、

二時半を過ぎて、「傅斯年の總指揮のもとに盛大なデモ行進(示威游行)にうつり、秩序整然と行進し、

そのコースは、陸軍部駐署京師憲兵排長白岐昌の五月五日附呈報に見ゆ。(⑭一七三頁)

四時半東城の趙家樓にある親日派の巨頭・交通總長曹汝霖（二十一ヵ條を結んだ當時の外交次長）邸にむかい――尤も曹邸の周圍には、二百餘名の巡警が守備したが、

この日正午、曹汝霖と陸宗輿・章宗祥の三人は、總統府の宴會に出席していたが、曹に歸るなと勸める者が居た。しかし曹は、おそるに足らぬと言って、章と共に歸って來て、この事件にぶつかるのである。（⑮一六七頁）

折から居合わせた〔請暇歸國中の〕駐日公使（對日借款を結んだ當事者）章宗祥と陸軍部航空司長・丁士源を襲い、曹はその婦人の內房に隱れたが、章および彼を援護した中江丑吉氏を毆打し、家に出火させるといった事件を惹起した。

このとき官憲の手がまわり、落後した北大學生二〇人、高師生八人、法政專門生二人、中國大學生二人、計三二人が逮捕された。尤も同月七日朝になって、北京大學校長蔡元培の身柄引受けによって釋放され、各校に送り屆けられた。（⑭一二二、一二六頁）

さらに學生團は幣制局總裁陸宗輿（二十一ヵ條を結んだ駐日公使）の家に赴いたが、機關銃を備えた軍隊の林立にあって退散した（⑯四一頁）。そして翌五日北京の學生たちは、總罷課（授業放棄）をやって全國に訴え、愛國鬪爭に入った。

これより先、李大釗の主編する『每週評論』は、たえず日本の陰謀を暴露し、曹・陸・章の賣國奴的罪業を摘發し⑭、またソヴェットの『新憲法』・『土地法』・『婚姻法』と、革命の經驗を紹介して來た⑰。そんなことで、この『每週評論』は一九一八年十二月末北京で發行されたものが、第二十六期以後、發禁となる。丸山松幸・齋藤道彥編『李大釗文獻目錄』（東洋學文獻センター、一九七〇年三月刊、一五―一七頁には、『每週評論』二八號（一九一九年六月二九日）、二九號（七月六日）、三〇號（七月一三日）、三一號（七月二〇日）、三五號（八月一七日）にのった李大釗の論題が出ているから、三六號以後發禁になったものか。―天野）

つづいて五月七日の國恥紀念日、北京の中央公園で開かれた國民大會は忽ち禁止され、

十時には中央公園の門は閉ざされ、天安門の左右二―三華里（約一―二キロ）の間を交通止めとし、二千餘人の巡

警・數百の馬隊が配置され（時の警察總監は吳炳湘）、約七―八萬にのぼる學生や大衆を解散させた。（⑮一六九頁）解散した學生たちは、街上で愛國デモを展開した。いっぽう天津・上海（二萬人）・南京・武漢・濟南・太原・安慶・長沙・廣州・福州・重慶・南昌等の學生も、此の日大規模な集會とデモ行進をし、北京學生の愛國鬪爭を聲援したのである。（⑱四六頁）

この日、留日學生三千餘人も、一つは東京三宅坂のドイツ大使館前に、他の一つは葵橋（今の溜池）電停附近の廣場に集合、「五・七國恥紀念」・「直接收回青島」・「打破軍國主義」・「保持永久和平」などのスローガンを掲げてデモ行進にうつって、各國大使館を歴訪し、二重橋前と清國公使館（今の首相官邸あたり）の附近で、わが官憲と衝突、負傷者二十七人、逮捕された者二十三人といった事件をおこした。（⑫九九―一〇〇頁、⑪一三一―一三六頁）

ところで北京政府の彈壓は意外に嚴しく、

責任者教育總長傅增湘の辭表提出、同月十五日受理。北京大學校長蔡元培の九日辭職離京、つづいて工・法・醫および高師各校長の辭職離校。（⑭一二七、一三〇頁）

かえって學生運動を激化し、五月十九日北京高等以上の學校十八校の一齊罷課（受講放棄）を決行、講演團（十人團形式採用）を組織して愛國宣傳を展開し、「仇貨を抵制し」、「青島を爭回せよ」と叫んだ。

『每週評論』第二四期（一九一九年六月一日刊）はいう、「五・四運動以後、社會は學生の擧動に對して殆んど一人として注意しないものはなくなった。まっ先に露天演說をやったのは、北京大學の平民演說團だけだったが、五月七日以後になると、北京の學校は中學（わが高校にあたる）から大學まで、講演團を組織しないものはなくなった」と。（⑭一六三頁）そしてこの講演團は、十九日の一齊罷課から三～四百人に、二十日には六～七百人に、二一日には更に一千餘人にまで增えた。（⑯五五頁）

また十八日には、北京の學生が日本商品を蒐集して、天壇の向いに在る先農壇に搬び、數百人の前でこれを燒却

する擧に出た（⑯五八頁）。この日杭州でも、學生たち（杭垣各學校學生救國團聯合會）が新市場と杭州ステーションの前でかれらの持つ日本商品を燒いている。（⑯八〇一―八〇二頁）

これに對し駐華日本公使の抗議でもって、五月二五日「集衆游行・演說・傳單散布制止令」が出て、

これより先、五月六日・八日・十四日の三回にわたって、北京政府は學生運動彈壓命令を出している。（⑯七九一、七九二、七九六頁）

デモを許さぬばかりか、北京大學の周圍は武裝警官でとりまき、學生の行動を監視し、新聞の檢閲を嚴にし、進步的な雜誌を發禁にした。（⑭一六三―一六四頁）

今度は學生たちは手に布袋をもち、或るものは「國貨」の二字を書き、或るものは「提唱國貨」の四字を書き、ハミガキ粉・石鹼・ハンカチ・香水・タバコの類を賣り、また雜誌『國民』・『國體與青年』を賣りあるいて、學生聯合會の費用にあてた。

ところが六月二日、東安市場で國貨を賣る學生七人が軍警に捕われたことから、學生聯合會は翌三日以後ふたたび街頭演說をやることを決定、二十餘校より七百餘人を出發させるや、そのうち一七八人が逮捕され、北河沿の北京大學法科大講堂を臨時拘留所にあてた。その翌日出發させた學生は前日より倍增、この日捕えられた學生は八百人に近く、北京大學法科だけで拘留しきれず、同大學理科講堂をも臨時拘留所とするに至った（⑫九〇頁、⑯二五二―二五三頁）。同時に北京政府は、多數の軍隊（六―七百人）を北京大學の周圍に駐營させ、學生の反抗を抑えんとしたが、學生側は一だんと勇敢な戰士として六月五日には六千餘人（二千餘人ともいう、⑫九一頁）の宣傳隊を出動させ、（⑱四八頁）

數十人が一組となり、拘留時の用意に荷物をかつぎ、「講演する暇も無く、沿道を走って聲を竭して疾呼し、怒潮洶涌、收拾できぬ」狀態を呈し、軍警もただただ手を束ねて放任するのみ。（⑭一三八頁）

警察の力は完全にその作用を喪失し、

六日には、北大法科に八二七人、理科に一三九人が拘留され（⑫九〇―九一頁）、さらに法政專門學校の校舍にも收容された。（⑱四八頁）

また二千餘人の一隊は、學生拘留所におしかけ、逮捕を要求。內部では拘禁學生が法科大樓の上から旗をふりつつ怒號し、軍警もこれを制止する術が無かった。

このとき（六月七日）軍警の包圍を急いで撤去せよとの命令が發せられ（⑭一三八頁）、ここに拘禁學生も釋放されたのである。

これより先、北京の學生罷課（スト）の報が全國に傳わるや、天津（十五校、萬餘の學生が五月二三日スト）・濟南（一三日）・保定（二四日）・上海（二五校、二萬、二六日）・太原（一〇校、二千餘、二六日）・蘇州（二八日）・南京（二一校、二九日）・杭州（一七校、三千、二九日）・安慶（二九日）・開封（三一日）・南昌（三一日）・武漢（六月一日）等の學生は、相前後して授業放棄を斷行⑯。六月三日北京警察が大學學生を逮捕したとの情報が傳わるや、學生運動は一だんと沸き立ち、授業放棄は一百餘の城市に波及した。

たとえば湖南長沙では、六月三日に湖南學生聯合會の成立を宣言すると共に、無期限ストに入るや、學生たちは女學校をふくめ、學校ごとに無數の「救國十人團」をつくり、愛國宣傳（文書・講演・劇などで）と日貨排斥の實行にうつる。ときの湖南督軍兼省長張敬堯は、學生の卽時復學を命令したが效果なく、ついに夏休みを繰り上げ、寮を閉鎖する。六月十二日以降學生たちは期末試驗の受驗を拒否し、講演團・演劇團を組んで一層廣汎な運動にうつる。（⑲一〇〇―一〇一頁）

ところで其の間、學生の組織化が擴大強化され、五・四デモの翌日（五月五日）、北京大學法科大禮堂（大講堂）で「北京中等以上學校學生聯合會」が成立（⑯四九―五一頁）、それを契機として各地に學生聯合會が結成され、

五月十一日上海學生聯合會（四四校、うち十二校が女校、⑮一九二頁）、武漢（一五校）、十二日杭州・濟南、十三日開

封、十四日天津、十五日安慶、二四日蘇州、二五日廣東、六月二日南京に成立、六月三日には湖南學生聯合會が成立す。（⑯六一―九七、七九三―八二九頁）

六月十六日には上海共同租界にある大東旅社で、各地の學生代表三十餘人によって「全國學生聯合會」の誕生をみたのである。（⑱二五八頁）

ちなみに此の「全學聯」には、なんら嚴密な組織・綱領とては無く、全國を指令する中央集權的實力も無かったが、この組織こそ中國における人民大衆の政治組織のはじまりであり、學生の新中國運動の開始、卽ち國民革命への組織發展への開始であったと、鈴江言一氏は發言せらる。（⑳九―一〇頁）こうした學生聯合會は、大多數の學生の團結の基礎の上に政治鬪爭を實際にすすめる指導機關となり、革命的青年の「先鋒隊的作用」を發揮したものである。（㉑五一頁）

四

さて其の後、運動の中心は北京から上海へ移るとともに、運動の主力が學生から勞働者へと移行する。上述のごとく「五・四」運動以來、各地の學生の日貨排斥・國貨提唱は、

上海では、五月十日學生十數人が南市の商店で日本商品を檢査したり、十七日には「救國十人團」（その推進作用を起したのは、學生たち）が共同租界の大百貨店先施公司・永安公司の日貨販賣に對する警告を發するなどの擧があり、（⑮一九七―二〇一頁）

商業界も之に嚮應して實行に移るや、

その上海市での具體例は、⑮二〇一―二一九頁「上海商界抵制日貨和提唱國貨運動」をみられたい。

「國貨」（民族資本家の製造商品）の販路を大々的に擴張することとなって、民族資本家はこの學生運動に對し熱烈な歡迎の

態度を示した。（⑱四八頁）

かかる際、六月三日の北京における學生逮捕の報が傳わるや、かれらは上海學生聯合會の説得と世論に促されて、同五日上海南北市および兩租界の中國商店は罷市（閉店スト）を宣言した。（十日まで繼續す）

すなわち早朝は城内（南市）だけの罷市であったが、午前九時にはフランス租界、十一時には共同租界へ波及した。しかも當日店先に貼られたビラは、「學生を救うために罷市する」とあったが、六日以後になると、「國賊を除かざれば、門を開かず」（「不辦賣國賊不開門」）との文句が添えられた。（⑭一四九頁）

この五日の午後五時から、租界寧波路の卡爾登（カールトン）西飯店（レストラン）で上海商學各界聯合大會（出席者二〜三百人）の席上、北京大學の學生で運動の初期から關與した許德珩君が北京代表として、各商店は「罷市後援學生」などの紙片を高く掲げているが、願わくは直ちに「懲賣國賊」と改めて欲しい。も一つは日本人と事を構え、軌道にはずれた行動をせぬようくれぐれも希望すると發言した（⑮三〇四—三〇五頁）。それがいれられて、散會後早速領袖たちは南京路一帶をP・Rした。〔その記事を私は見出して、後年（一九三五年）彼が北京大學教授時代に同僚だった陶希聖君が私を主人公としての宴席で紹介されてのち訪問もするし、先年（一九六五年）訪中時、北京飯店で許夫妻の來訪招宴を受けた私にとっては、感慨無量である。〕

この空前の出來事は忽ち全國に波及し、上海附近の市鎮（六日から浦東・江灣・閔行）から全國主要城市（六日から松江・寧波・厦門・南京、七日から下關・浦口・鎮江・吳淞、八日には蘇州・常州・無錫・金山・揚州・蕪湖、九日杭州、十日宜興・常熟・濟南・天津、十一日安慶・漢口、十二日武昌・九江）で「罷市」が決行され（⑭一五一頁・⑯八三一—八五二頁）、北京學生の愛國運動に呼應して北京政府の措置に抗議したのである。

なお河北の天津では、六月十日から十三日まで罷市の擧に出たが、ここでは六月二四日各界聯合會は抵制日貨（日本商品不賣）委員會を組織し、各業者の調査をやると共に、學聯會委員于蘭渚の指導下に「跪哭團」を編成し、

團員たちは皆白い孝服（喪服）を着、手に哭喪棒をもって、日貨抵制に遵わぬ頑固な商家の店先で哭勸するといった措置に出た。（㉒八八—九〇、八七頁）

また湖南の長沙では、五月二八日國貨維持會が結成され、日貨不賣運動を展開し、奸商を摘發し商品を沒收して、日貨燒却大會を開いて運動をもりあげた。一時は湖南督軍張敬堯に彈壓されたが、十二月二日には、一そう大規模な日貨燒却デモが行われた。（⑲一〇一、一〇九頁）

ところで此の六月五日の「罷市」は、無形のうちに勞働者の罷工（ストライキ）を資本家側にも合法的な正義行動として是認させた。

この五日のスト時には上海の學校の童子軍が出て、警察の巡捕と協力して治安の維持にあたるし（上海の高等小學から國民小學まで一律休校となる）、劇場・遊戯場・映畫館まで夜休むし、街の錢莊や兌換店（兩替屋）まで店を閉めたとある。（⑮二九五—二九六頁）〔つづいて又、上海の華商銀行十二行が八日ストに參加す。（⑮三三〇頁）〕

すなわち此の日（五日）「罷市」の情報が傳わるや、十一時半滬西（曹家渡）の日商内外棉第三・第四・第五廠の男女勞働者五～六千人がまっ先にストに突入、午後一時半には浦東（陸家灣）の日華紗廠および楊樹浦の上海紗廠の勞働者が續いてストに入り、同時に華商の商務印書館と中華書局の印刷勞働者が政治ストをやり、第一日の紡績・印刷勞働者のスト人員は、二萬人以上に達した。（⑮二九三頁）

尤も勞働者の政治運動は、「五・四」運動の二日前、山東濟南の搬運工人（運搬人足）三千餘人が濟南北崗子で青島回收演說大會を開催し、五月十一日には山東勞働團が北京の彰義門外で大會を開き（會衆數萬）、彼らの名で勞働大衆は國家の領土主權の完整（保全）のため奮鬪せんことを誓うと中外に通電し（⑭、⑯七九三頁）、また五月二十三日天津で一萬餘の學生の罷課後、海關（稅關）一帶の搬運工人が全體會議を開き、天津に入港する日本商船の荷卸し拒否を決議している。（㉒八四頁）

六月六日以後、上海では英・米・佛商の諸企業に擴がり、

六日英商祥生鐵廠（四百餘人）・求新機器廠・鋭利機器廠スト。南市華商電車公司全面スト。法租界電車公司・英美電車公司の運轉手車掌の部分スト。なお英美香煙廠の勞働者が門前でストの協議中、警官と衝突。（⑮三〇六―三一一頁）

七日吳淞の滬寧・杭甬鐵路總機廠、日本人の持株の多い興發榮機器造船廠スト、黃埔江に停泊中の汽船の舵工・水手・火夫らのスト。北浙江路の信通織布廠、英商別發印書房スト。（⑮三一八―三二一頁、⑯八三四頁）

八日外商太古洋行・馬謙吉（マッケンジー）公司のクリーのスト（⑯八三七頁）。この日、上海淞滬護軍使は上海道尹と會同して、北京政府に「此次滬（シャンハイ）上風潮始由學生罷課、繼由商人罷市、近且將有勞動工人同盟罷工。……星星之火、可以燎原。失此不圖、將成大亂」と急電している。（㉓一一八頁）

六月九日、十日にいたって勞働者のストライキは高潮に達し、

『工部局公報』第十二卷第六四三期（一九一九年七月二四日）は、九日ストに參加する勞働者數は約二萬四千人と計上。すなわち黃浦江兩岸の碼頭（埠頭）・ドック（耶松公司老船塢・瑞鎔機器造船廠工人約一千人と江南船塢）の勞働者、全市の自動車運轉手（約二千人）、米商美孚および亞細亞火油棧の勞働者のスト參加によって、輸出入客貨航運は全部停止狀態に陷る。また先に警官と衝突をおこした浦東の英美香煙廠の男女勞働者五千餘人、同じく英商和平鐵廠も全面ストに入る。更に全市の衞生夫が前日家々に聲明して、一律ストに入る。（⑮三三三―三三八頁、⑯八四〇―八四一頁）

十日には滬寧・滬杭・淞滬鐵路工人、寧波・廣東兩幇の水手（海員）の一律ストで陸海上交通ストップ。兩租界の馬車夫、上海電話公司接線工（交換手三五〇人、外に工人一五〇人）、英界電車公司・工部局電力處の電器修理工、榮昌火柴（マッチ）第一・第二廠・華昌盒片廠・大有搾油廠（湖北人五〇〇人）工人、外商飯店從業員が全面ストに突入。（⑮

三四二―三四八頁、⑯八四五―八四七頁）

上海全市の商工業および交通が停頓し、全市を麻痺狀態に陷れてしまった。そして上海でストライキに參加した勞働者數は、約六～七萬人にのぼり、

この數字は、鄧中夏『中國職工運動簡史（一九一九―一九二六）』（一九五三年北京・人民出版社刊）八頁に據ったが、この中には當時積極的に「罷市」した店員は含まれない。

これによって勞働者階級が、政治勢力として政治（反帝）鬪爭の舞臺にはじめて登場した。

しかも當時は、中國共產黨も成立せず、工會（勞働組合）も發達せず。勞働者たちは同鄉團體（安徽帮・寧波帮等）・祕密結社（哥老會・老君會等）を利用して、こうした大ストライキをやったのである。そればかりか、「五・四」以後、勞働者のストは年と共に增加し、規模もふだんに擴大していった。

中國における勞働者のストライキ回數・人數・日數統計表

年次	スト回數	スト人員	平均毎次スト人員	スト日數總數	平均毎次スト日數
一九一八	二五回	六、四五五人	五三八人	一二四日	八・二七日
一九一九	六六	九一、五二〇	三、五二〇	二九四	五・六五
一九二〇	四六	四六、一四〇	二、四二八	一五七	七・一四
一九二一	四九	一〇八、〇二五	四、九一〇	一五五	七・三八
一九二二	九一	一三九、〇五〇	四、六三五	四五二	八・三七
一九二三	四七	三五、八三五	二、一〇八	一三四	六・三八
一九二四	五九	六一、八六〇	三、四三七	二四一	九・二七

備考『第一次中國勞動年鑑』第二編、一九二八年刊、一三九頁

五

さて此の上海における勞働者のストライキの風潮は、忽ち各地に波及し、京奉鐵路の唐山・京漢鐵路の長辛店の勞働者、および江西の九江勞働者がつづいてストに入り、デモ行進をやり、津浦鐵路の勞働者もストを釀し出した。（⑱五一頁）さらに天津の勞働者が大ストの準備を始めるや、六月十日天津總商會は北京政府に（大總統・國務院）あて「津埠に棲息する勞働者數十萬の衆が、現在不穩の象を發生す。もし遷延して決せねば、實事を演成せん。其の危厄の局は、痛苦、罷市に過ぐるものがあろう。……請う急いで明令を以て曹・陸・章を懲辨し、および學生を保護して以て國人に謝して、目前を救え」と急電し（⑫一〇七頁、⑯八四四頁）、また北京の中國銀行團も、上海の各銀行から「政府がもし曹・章・陸の罷免命令を發表せねば、上海の金融は維持の法なく、危險萬狀」との電報を受けて、之を政府に轉呈して、各銀行代表が政府當局に詰め寄った（⑮四二〇頁）。かくて北京政府も大衆の壓力に屈し、六月十日大總統令を以て「交通總長曹汝霖呈請辭職、曹汝霖准免本職。此令。」「駐日本國特命全權公使章宗祥呈請辭職、章宗祥准免本職。此令。」「幣制局總裁陸宗輿一再呈請辭職、陸宗輿准免本職。此令。」の辭令を發表した。なお又同月二八日、中國代表のパリ平和條約の調印拒否として、その終末を告げるのである。そして「三罷」鬪爭も、六月十二日から學生は出校しはじめ、商工業は開市、勞働者は復業しはじめた。

ちなみに北京大學校長蔡元培は、五月九日に辭表を出して南下したが、運動の全期間を通じて、かれの復職は學生の要求の一項目となり、それは全社會からの支持を受けた。政府が任命した別の校長を、學生たちは拒否しつづけた。最後に八月になってかれの復職が實現するが、復職にあたって蔡元培は「北京大學學生および全國學生聯合會に告ぐるの書」を公表。書中かれは、學生が全國民の愛國心を喚起するために、「神聖な學術を犧牲にすることを惜しまずして、救國の運動に從事」したことについて、社會人の立場から感謝している。……「しかし」とかれ

は云う。その手段として學業を放棄したことは、主觀的意圖いかんに拘らず、結果としては社會に損失をかけたことになる。愛國心を喚起した效果は大きいが、それよりもその代償として社會に與えた損失の方が、もっと大きいのだ。この損失は、今後の努力によって埋めなければならぬ。學生は學業を廢する非常手段によってではなく、學問そのものによって「社會に服務」すべきだ。政治は一時の事であり、教育は永久の事である。「わが國文明の前途百年の大計を定める」ために、「諸君と共同して」努力しようというのが、その公開狀の大意である。(㉔九九頁)

六

之を要するに、「五・四」運動は日本帝國主義の中國侵略反對を標榜して立ち上った民族運動――抗日愛國運動であり、非武裝の組織的行動(「三罷」―罷課・罷市・罷工)が、學生・商人・勞働者の統一戰線を通じて功を奏したものであり、當時まだ中國共產黨も無く、中國國民黨とて自ら指導する實力を有せず。指導の中心となったものは、インテリゲンチャ――毛澤東によれば、共產主義的知識人・革命的小ブルジョア知識人およびブルジョア知識人(㉓五一四頁)――であり、「五・四」の當初は學生運動として展開したものの、「六・三」運動に發展したときには、廣範なプロレタリア階級・小ブルジョア階級およびブルジョア階級も參加し、全國的な反帝・反封建運動に移り(㉕五一四頁)、とりわけ勞働者階級が指導的役割を演じ、これまでの革命が全く持たなかった性格からして、今日では一般に中國における新民主主義の發端とされている。因みにこの運動には、兵士と農民の參加を見ていないことを附言しておく。

周恩來夫人の鄧頴超は、その『五・四運動についての回想』で「五・四愛國運動および新文化運動そのものは、反帝・反封建的性質のものであったが、當時われわれの意識の上では、ぼやけていた。一九二一年中國共產黨が成立して、はじめて中國革命は反帝・反封建革命であることが、はっきりと指摘され、われわれの認識もまた、次第

に明確となった。「五・四」のとき、われわれは知識分子が勞働者・農民と結合することを知らなかった」と。（⑩一一〇頁）ちなみに五・四運動と新文化運動との關係を、華崗は「五・四運動以前にすでに開始された新文化運動は、五・四運動のために思想解放の自覺的條件を準備し、五・四運動は新文化運動に大衆的基礎をあたえた」とみている。（⑩一九二頁）

七

なお「五・四」運動時の孫文について、附言しておく。當時彼は上海の佛租界に閑居し、ひたすら著述に專念していた。

すなわち『孫文學說』・『實業計畫』（"The International Development of China"）を、上海で發表す。ときに年五十三歳。

この間「五・四」運動がおこり、

許德珩氏によれば、「五・四」の北京學生の示威運動で、三十一人の學生と一人の市民が逮捕されると、孫文は段祺瑞に打電して、速かに釋放せよと促がし、また五～六月の間、各地學生代表が上海に集まって全學聯を組織するや、孫文は屢々學生たちを家に招き、學生たちを鼓舞した。六月十六日全學聯が成立してからのある日、孫文は全學聯の要請で上海環球學生會で、一場の講演をおこない、當時のパリ平和會議を分析し、ロシア革命を講じ、學生たちを鼓舞したと。㉖

かれは此の運動には何らの武力無く、ただ團結だけで勝利を占めたことに、強い感銘を受けた。

孫文は、一九一九年六月「戴季陶との談話」で、「人民はうわべは無力なようだが、ある問題について直觀的理解をもつようになると、その實力は誠に大きなものとなり、銃砲に幾十倍・幾百倍することができる。何故なら

ば、人民にはストライキの力と、市場・商賈中止の力と、納税拒否の力と、代表撤回の力がある」と述べた。彼はそこに「たたかう人民」を認識しはじめた。そして此の年六月に『民國日報』に副刊「覺悟」を創刊、また理論雑誌『建設月刊』（胡漢民ら編輯）も同年八月に創辯している。

〔なお「五・四」運動に極めて冷淡だったものに、「護法」（國會そのものと其の議決した法律を護る）を標榜する南方政府と、法律上「民意を代表する」責任をもつ國會があった。⑧〕

ところで新時代に置き去りを喰った孫文の「中華革命黨」（一九一四年七月八日東京で結成、一九一六年四月末、本部を上海に移す）は、戴季陶らの進言もあって一九一九年十月十日黨務を刷新して「中國國民黨」と改稱、孫文自らその總理となる。

しかし一九二四年一月の黨の改組のあるまで、黨は何ら見るべき活動を殘さなかった。（㉗一二七頁）

此の頃、孫文はロシア革命に異常な關心をよせ、一九二〇年アメリカ經由でレニンに對し革命成功の祝電を送り、翌二一年十一月第三インターナショナル（Cominternー九一九年三月成立）代表マリン（H. Mahlin. レーニンの秘書）と廣西省桂林で二度會い、兩者の連携や國民黨の改組のことが論議され、翌二二年十二月にはソ連の正式代表ヨッフェ（A. Joffe）と上海で會談し、コミンテルンの國民黨援助の約束をえ、

孫文はこれより先、廣東軍政府から追い出され、一九二二年八月上海に來ていたのであり、布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』（一九二七年大阪屋號書店刊）によれば、ヨッフェとの會談ののちに、孫文は自分の失敗は主としてブルジョア出身の知識階級に依頼し過ぎたことに原因する。革命の眞の力たりうるものは、勞働者と農民だけだと悟ったという。

翌二三年一月二六日孫文・ヨッフェの『共同宣言』（㉘二四一―二四二頁）が發せられ、ついに一九二四年一月中國國民黨の改組が實現、孫文は「三民主義」を「新三民主義」に改め、また「聯俄・容共・工農扶助」（ソ連と連合し、共產黨を容れ、

勞働者農民を扶ける）の三大革命政策を定め、黨の第一次全國代表大會の席上、「中國革命が勝利するためには、必ずロシア革命の經驗と方法を學び、ロシアを先生としなければならない」と訴えた。

一九二四年孫文が黄埔軍官學校で行なった新三民主義についての十六回にわたる講演を中心にして、小島祐馬氏は『中國の革命思想』（一九六七年、筑摩書房刊）一二八―一四八頁で解説されている。

註

① 加藤伯傳記編纂委員會（伊藤正德）『加藤高明』下卷、一九二九年刊。

② 吉林師範大學中國近代史教研室編『中國近代史事記』一九五九年刊。

③ 東亞同文會編『增補支那關係特種條約彙纂』一九二二年刊。

④ 許田「對德奥參戰」（『近代史資料』一九五四年第二期）

⑤ 劉立凱・王奠『一九一九至一九二七年的中國工人運動』一九五三年刊。

⑥ 池田誠『中國現代政治史』一九六二年刊。

⑦ 橘樸「中國民族運動としての五四運動の思想的背景――學生運動の意義及效果――」（『中國研究　橘樸著作集』第一卷、一九六六年刊）

⑧ 拙稿「新文化啓蒙運動」（『中國研究』7、一九五七年三月、江南書院刊）

⑨ 毛澤東「人民民主主義獨裁について」（『毛澤東選集』第四卷、一九六八年外文出版社刊）

⑩ 華崗『五四運動史』天野元之助閲、池田誠・河地重造共譯、一九五二年、創元社刊。

⑪ 實藤惠秀・實藤遠『アジアの心』一九五六年刊。

⑫ 洪煥春『五四時期的中國革命運動』一九五六年、北京三聯書社刊。

⑬ 張靜廬輯註『中國現代出版史料』甲編、一九五四年刊。

⑭ 華中工學院馬克思列寧主義資料室編『五四運動文輯』一九五七年、湖北人民出版社刊。

⑮ 上海社會科學院歷史研究所編『五四運動在上海史料選輯』一九六〇年刊。

⑯ 中國科學院歷史研究所第三所近代史資料編輯組編『五四愛國運動資料』一九五九年刊。

⑰ 『初級中學課本　中國歷史』第四冊、人民教育出版社、一九六五年十一版。

⑱ 黎澍「五四運動」（『近代史論叢』一九五六年、北京學習雜誌社刊）

⑲ 小野信爾『毛澤東』（一九六七年、人物往來社刊）

⑳ 鈴江言一『中國解放鬪爭史――原題中國無產階級運動史』（一九五六年、石崎書店刊）

㉑ 李龍牧「關于五四運動的幾箇問題」（『歷史研究』一九六三年第三期）

㉒ 馬惠卿「五四運動在天津」(『近代史資料』一九五八年第二期)

㉓ 丁守和・殷叙彝・張伯昭『十月革命對中國革命的影響』(一九五七年、北京人民出版社刊)

㉔ 竹内好『現代中國論』(一九六三年、普通社刊)

㉕ 毛澤東「新民主主義論」(『毛澤東選集』第二卷、一九六八年、外文出版社刊)

㉖ 許德珩「紀念與回憶」(『人民日報』一九五六年十一月十一日)

㉗ 高橋勇治『孫文』(一九四四年、日本評論社刊)

㉘ 波多野乾一『中國國民黨通史』一九三三年刊。

補記 私は小冊子『五四運動』(一九七〇年五月、香港朝陽出版社刊)を讀んで、五月四日天安門の前で學生たちは、宣言と傳單を通過したとして、宣言では「夫山東北扼燕晉、南控鄂寧、當京漢津浦兩路之衝、實南北之咽喉關鍵。山東亡、是中國亡矣。我同胞處此大地、有此山河、豈能目睹此強暴之欺凌我、壓迫我、奴隷我、牛馬我、而不作萬一生之呼救乎?」と述べ、最後に「我同胞有不忍於奴隷牛馬之痛苦、亟欲奔救之者乎?卽開國民大會、露天演說、通電堅持、爲今日之要著」と結んでおり、傳單中では「今與全國同胞立兩個信條道、中國的土地、可以征服、而不可以斷送。中國的人民、可以殺戮、而不可以低頭。國亡了、同朋起來呀!」と大聲で疾呼したとある。(二頁)を補足したい。